書　　評

Henrich von Nussbaum (Hrsg.)
Die Zukunft des Wachstums, Kritische Antworten zum » Bericht des Club of Rome «, Bertelsmann Universitätsverlag, Düsseldorf, 1973, 352 Seiten

本書は Nussbaum の編集にかかるものでローマクラブの「成長の限界」に対する批判を行ったものである．Myrdal, Tinbergen 等世界的に著明な学者10余名の論稿を集録しているが，特に H. W. Jürgens の「人口計画の諸戦略—人口過剰のドラマに反対して—」は多くの示唆にとむと思われるのでその要旨を紹介したい．Jürgens は Kiel 大学の人口学の教授職にある人で同時に，1973年に創設された Bundesinstitut für Bevölkerungsforschung の所長をかねる人である．

彼の論稿は，1. 前言，2. マルサス主義の非難，3. 人口発展の法則か，4. 産児反対は理性的であろうか，5. 誰れが生殖行動を決めるのか，6. 最適人口の神話，7. 結語となっている．

彼は，まず，「成長の限界」における人口の取扱いが甚だ不十分で，資源，環境汚染等は事実に即した予測が行われているが，人口現象は不変なもの，運命的なものとして取扱われ，かつ，ちんぷなマルサス理論が前提されており，人口の合法則性が無差別に適用されていることが決定的な欠陥であるとする．マルサス主義に対する批判は，もちろん新マルサス主義に向けられているが，人口政策を産児制限適用の技術であるとする俗論に対しこれを批判する．

人口の予測の為に仮定は必要であるが，その射程を冷静に自省しなければならない．人口現象を規則性と合理性に還元して説明し予測しようとするとき，往々にして科学より政治と世論が先行するのは遺憾である．電気（暗やみ）と受胎との間に一定の関係があるという奇妙な仮定の如きはその一例である．教育水準の上昇は出生率を低下するという仮定も同じで，却って出生率を上昇させる場合がある．原因が条件の組合せ如何で非常に異った，時に正反対の作用さえ生じるのであるから，人口発展の考察と予測は合法則性に基づく解釈から解放される必要があろう．

「成長の限界」は人類が生き残る為には出生抑制を当然の前提としているが，この命題の普辺妥当性は疑わしい．その1つの例証として，彼はアフリカの新生独立国における異民族の統一は次世代の教育による言語の統一，連帯感と国民感情の創出にまたねばならぬとして，国民の未来を保証する次世代の制限は不可能であるという．また未来への抑制もさることながら今日的課題の緊要性に対応する現在的行動こそ重要であるし，現実の民族的多様性とデモグラフィックな状況の多様性を短期間によく克服しうると仮定するのは，たんなるユートピアにすぎないと考えている．

工業化社会では，出生の抑制の社会的調節が困難となり個人の恣意に委されているが，世界的予測に即した出生抑制はあり得ないのが実相といえる．最適人口概念が最近浮び上ったのも，それは，むしろ必要性の表現にすぎないのであり，人口過少といい過剰というのもそれは畢竟相対的概念にすぎないのである．

世界平均モデルでは，現実の多様性と相互作用は埋没する．予測された破局は少規模では比較的早く現われ或いはすでに現われている．人類生き残りの為の静止人口も，何を最適条件とするのか．人口は国家的，地域的基礎にたってのみ有意義に判断し予測しうるもので，高度に様式化された先入観によって人口の発展を制御し世界的に絞ろうとすることは，開発を促進するどころか，危険さえあると結論する—果せるかな，第2次ローマクラブの報告が第1次に比し，はるかに地域的具体的になったことは周知のとおりである．

（林　　茂）